半島の弟妹に寄す[[1]](#footnote-1)

香山光郎

はしがき

　若い人の中には、私のところへ訪ねて來て、自分は將來どうすればいゝかなど相談を持掛けるものがある。また遠隔の地から手紙で同様のことを問合はせて來るものもある。男子もあり女子もある。それらの人はいづれも眞面目で道を求める熱意を持つてゐながらしかも迷つてゐるものである。彼等の顔や目付には疑惑や煩悶の色が現れてゐる。

　私はこれらの若い人たちに十分得心の行くやうな指導を與へる力のないことが悲しい。しかし年齢に於いて一日の長があり浮世の波風に揉まれて來た多少の經驗を持つてゐる私としては、彼等の問に對して何んとか返答を與へねばならない。實際私はいろいろと彼等に忠告を與へて來た。私のこの不十分な忠告が彼等の煩悶を解決するのに、果してどれだけ役に立つたか知らないが、一人の兄の氣持としては誠心誠意を盡したつもりである。

そこで私は、私を訪ねたり、私に手紙をよこしたりして煩悶を訴へたやうな弟妹が、數多くあるものと仮定して、それらの可愛い弟妹たちにこの手紙を寄せるものである。

Ｋ訓導の話

　ある日某國民學校の訓導Ｋ氏が私を訪れた。彼は私とは顔知合といふ程度で素より親交のある間柄ではなかつた。彼の訴へるところでは、彼は訓導の職にあること五年であるが現在のまゝでは延びる見込がないから專門學校に入つて勉學したいがどうかといふのである。

　彼は母と妻子と五人ぐらしで、妻は妊娠中であり、子供が殖えるに從つて國民學校の俸給では生活が立たないといふことを付け加へた。

彼は師範學校に入る位だから頭の優れた方であらう。また物言振から察すると人生に對する野心もあるやうであつた。國民學校の訓導では生涯働いても、衣食に窮し野心も達せられないといふのである。恐らくＫ氏同様の煩悶を持つてゐる國民學校訓導は多數あるであらう。これは由々敷大事である。

私はＫ氏に訊いた、專門學校を終へたら必ず人生の野望を達し、生活も豊かになるかと。K氏は苦笑された。

私はまた言つた。大學を出た人で職にありつかず喰ふにさへ困つてゐるものもあるではないかと。Ｋ氏はもう一度苦笑された。

そこで私はトルストイの言を引いた。モスクワの大通を流れてゐる彼の多數の群衆はいづれも富と野望とを逐うて來たものである。しかし、彼の白髪の連中の中に果して幾人それを得たであらうか。富も野望も、すべて幸福は慾で得られるものではない。彼の白髪の乞食が若し生涯日々の與へられた務に勤みつゝ正しい道を歩いて來たならば衣食に窮することもなく隣の者からは感激され尊敬される身分のものになつたであらう、と、これと聽くと、Ｋ氏の顔には尋常ならぬ色が漂ふやうに見えた。

世界初等教育の父たるペスタロツチ先生は、田舎の一小學校教員ではなかつたか。當時のヨーロツパの總理大臣たちや富豪たちのことはもうとつくに忘れられてゐるのにこの貧しい教員は歴史の進むにつれて益々光りを發するではないか。伊藤公や山縣公も偉いには違ひないが、未來永く仰がれ祭られるのは恐らく吉田松蔭先生であらう。

宇宙を支配するのは因果の法則であつて、決して偶然ではない。人事現象も因果の法則によつて攝理さてれゐるのだ。強い木は棟樑となり、やくざの木は薪にしかならない。力ある人物は重く用ひられる。「桃李言はざれども下自ら蹊をなす」嚢中の錐は必[ず]盶頴して出づる日があるのだ。龍は池中の物ではない。職に高下はないのだ。釋尊は乞食であり、孔子は浮浪人であつた。スピーノザはレンズ磨きを業としてゐたし、二宮尊徳は作男であつた。諸葛亮は南陽の一村學究である。

輝かしい成功はその職が何んであるかに依るのではなくて、その職を如何にしたかに依るものだ。牛殺も成佛する。

誠ならざれば物なし。誠は天の道だ。至誠天に感ず。如何なる職であらうと、與へられたる職に誠を盡せば衣食も名譽も自ら來るものである。夏は思切つて暑く冬は思切つて寒い。これ誠だ。

Ｋ君よ。君の今の職は聖職だ。子女を導く聖職だ。その職に誠を盡したまへ。精魂を打ち込みたまへ。一生を捧げたまへ、そして果して、君の妻子が飢えるかどうか試して見たまへ。神は君よりももつと聰明に、もつと前知的に君の生涯を監視し、君の將來のために備へてゐらつしやるんだ。

K氏は歸つた。そして一個年間教職を務めてゐたが今春某專門學校に入つてしまつた。私はK氏の成功を祈るものではあるが、Ｋ氏が從前の職に一生[を]捧げるだけの大人物でなかつたことを遺感とせざるを得ない。

Ｐ詩人の話

ある日Ｐ詩人が私のところに刺を通じた。迎へて見ると今しがた留置場からおつぽり出されたやうな身装である。

「どうしたんです？」私は驚きながら訊いた。

「職はなく、宿料は溜まつて宿屋からしめ出され、昨夜は驛の腰掛で夜を明かしました。昨日の朝から何も食べてゐませんぬ。」

「何故職に就きませぬか。」

「いくら探がしてもないんです。」

　「ないことはない。あなたは上等の職を探すからでせう。」

「いや、どんな職でもいいんです。」

　「それなら衛生人夫になりなさい。」

「衛生人夫と申しますと。」

「便所を汲む人夫です。今京城府は人夫が足りなくて町中便所が溢れてゐる。」

Ｐ詩人は妙な顔をして默つて居つた。恐らく侮辱を感じたのだらう。

「衛生人夫つて、何んて美しい商賈だらう。人のいやがる仕事をして、人を喜ばせることです。友人に乞食して廻らずに衛生人夫になりなさい。」

といつて私はそこばくの錢を詩人に與へて返へした。

二週間ばかり經つてＰ詩人は又メツセンヂャーをよこして私に金の無心をした。Ｐ詩人も衛生人夫になる程の大人物ではないやうだ。どうも朝鮮には大人物が出なくて困る。

　文學と朝鮮文

東京の某大學の文學部に籍を置いた未知の一學生から手紙を受けた。東亞日報や朝鮮日報が廢刊された當時のことである。自分は文學で世に立つ積であつたが朝鮮文の発表機關がなくなる一方では心細い。文學を止めようか、どうしたものかといふ相談であつた。

「文學を書くなら日本文で書いて東京で出版せよ。朝鮮の文士になるよりは全日本の文士にな[れ]。」

私はかう返事を出して置いたが、その後消息はなかつた。

文學については同様の煩悶を訴へて來るものが多かつた。朝鮮文で書いたら出世が早いかも知れぬ。しかし小さな出世ではないか。今中等學校以下に居る朝鮮人で朝鮮文の文學の讀める朝鮮語文の力を持つものは稀であらう。朝鮮人として朝鮮語に一種の愛着を感ずるのは當然であるが、我等　天皇のお使になることばをわが國語としなければならない。朝鮮語をもつて日本の國語とするわけには行かぬぢやないか。また二つの國語を並用するわけにも行かぬぢやないか。事實を正視すべきであつて偏狭な氣持にこだはるべきではない。日本語は優秀な日本精神を包蔵して居り、日本文は今や世界文化を全部包攝して居る。だから日本語を學ぶことは日本精神を學び同時に世界文化の庫の鍵を握ることである。しかも日本語は今や一躍アジア諸民族に共通な國語となりつゝある。だから朝鮮人は須らく國語に精通すべきである。況して文學に野心あるものはどしどし日本文で書くべきである。（『新時代』1941年10月）

續・半島の弟妹に寄す[[2]](#footnote-2)

大死一番の蝉脱[[3]](#footnote-3)

一日、今春某醫專を卒業して、地方の某病院へ赴任途中の青年が私のところへ來た。未知の人で、私の著書の讀者だそうである。

私の内鮮一體の理諭には首肯出來るがそれでは朝鮮的な傅統が根こそぎ絶えてしまふではないか、そこをどうするか。その感情をどうするかといふのであった。

しかしそれは単なる一つの氣持に過ぎない。しかもそれはこのゼネレーシヨンと共に消滅し去るべきものであつて、現代の子孫はあたりまへの日本人として、あたりまへに生きて往くことだらう。要は今日のわれわれが現代の子女のために邪魔にならぬやうに心掛［け］、少[し]でも彼等の顔の立つやうな奉公をすることにある。

どうすれば次代の子女に邪魔にならぬか。吾等が從來の小さい心を棄てずに、わが朝鮮われわれ朝鮮人なんていつて居れば必らず次代の子女の邪魔になる。われわれが古い朝鮮人としては大死一番して、皇國臣民として生れかはることだ。理窟も文句も容れる餘地はないのだ。誠に奇麗さつぱりになるに定まつてゐる。そして朝鮮、朝鮮と思つてゐたかはりに日本、日本と思ふやうになつたら胸がすうつとするに定まつてゐる。内地人が、朝鮮人がなど、考へてはならない。鈴木が、金本がと考へるがよい。鈴木が惡ければ鈴木一個人が惡いのであり、金本が惡ければ金本一個人が惡いのだ。誰も鈴木をして内地人を代表させたこともなければ、金本にしてもさうだ。かういふ心持になれば不平も憂欝もふつとんでしまふ。

弟妹よ。もし君が偉い人になりたかつたら朝鮮一なんて吝なこと思はないで日本一になりたまへ。大きな指導者になりたけりや朝鮮人の指導者なんて、吝なこと考へないで一億日本人の指導者になりたまへ。大臣になりたけりや大臣に、大將になりたけりや大將にもなりたまへ。陛下にお仕へ申上げることなら皇國臣民たるもの、誰にも許されてあるのだ。日本は已にわれらの國ではないか。誰も日本をわれわれより奪ふことは出來ないのだ。そのためにはわれわれは血を以つて闘ふであらう。子々孫々魂を以つてわが祖國日本を飾り、血を以つてわが祖國日本を護るであらう。「わがのこすこゝろは千代に君が代をあがめまつらぬまもりまつらぬ」といふ歌が自ら流れ出るではないか。

　　修行と奉仕

私は多くの青年と逢つて話すのであるが、その度毎[痛][[4]](#footnote-4)切に感ずることは、朝鮮青年には修行と奉仕の觀念が至つて乏しいことである。修行は朝鮮語では修道といはれたもので、修道とは極少數の僧侶や物好のやることのやうに心得てゐる。

誰でも歌を歌ふ力は持つてゐるが、さればといつて誰でも聲樂家ではない。歌の修行を積んで初めて聲樂家になれるのである。如何なる技術も修行さへすれば大抵のことは誰にでも出來るものである。

ところが、多くの青年たちは學校さへ卒業すれば人生修行は濟んだかのやうに心得てゐる。それは大なる間違だ。修行は自分がやることで、人に教へて貰へる性質のものではない。

デモステネスが瀑布や海邊で演説の修行をしたことは有明な話であるが、如何なる方面に於いても、おほよそ大家と呼ばれるもので血の滲む永年の修行を經ないものはない。同門の弟子、即ち同窓でありながら、或者は大成し、或者は無名のまゝ朽果てたのは壽天その他の理由もあるが、大抵は修行を續けると續けないとに依るものである。

修行は技術を磨くだけではない。否技術は返つて末であつで、修行の根本は精神である。柔道にしても劍道にしても根本はその精神にあるのであつて、いはゆる腹が据はらなければ如何に技術を練磨しても大成せぬのである。書にしても、畵にしてもさうであるが、商賈にしても教員にしてもさうである。世に才子といはれながら零落れるものが多いのは、精神の修練を缺いたからである。

精神の修行のあるものとないものとは具眼の人には一目にして解る。眼付だけで、一言を發したゞけでもうその人の修行の程が覗はれるものである。だから就職をするにしても、上役から彼奴は駄目だと見られたらお仕舞で、これも心の磨如何によるものである。

乃木大将は武藝の外に漢字や禪の修行をされた。楠公も禪を修められた。朝鮮の畵聖といはれる金秋史も禪で精神を鍛へた人である。從容として死に就くといつたやうな人物は必らず修行をした人である。

修行の眼目は何んであるか、それは誠の人になることである。一言一句一挙手一投足が皆誠から出るやうにすることである。確乎たる信念を把握して、死生苦樂を物ともせず、己が所信に向つて邁進することである。神道でいはゆる清明心、または淨明眞心とは即ちこの誠であり、佛教の佛もこの誠のことである。

誠なきものはどんな様相を示すか。それは僞であり、謟曲であり、反覆である。上り調子であり、出鱈目であり機會主義であり、僥倖論者、偶然信者である。

腹が据はるとは、信念が出來、死生苦業を超越して、悠々騰々として道に進むことである。かう云ふ人を人間が出來てゐるといひ、でないものを成つてゐないといふ。人間が出來てれば決しで喰ひはぐれるやうなことはない。國家は人間の出來てゐる人間を要求してゐるのである。何時の世でもさうであるが殊に非常時に於いてさうである。

眞劍とか、眞面目とかいふことばは、誰もいつてゐるのであるが、その眞理に徹してゐるものは少いやうである。眞劍とは、本當の劍といふことだ。竹刀や木刀でなく、練習でもなくして、本當の劍で殺し合ひをする時は如何に不眞面目なものでも眞劍にならざるを得まい。眞面目にならざるを得まい。さういふ場合の心持ちを眞劍とはいふのである。ところが、弟妹諸君。君等は何時もかういふ眞劍な氣持でゐるのか。教室に於いて、運動場に於いて諸君は、死に面してゐるやうな眞劍さでゐるのか。若しさうだつたら諸君は立派な人物だ。必らず有用な偉材になるであらう。

自分の職業に當ること、戰場での一騎討にあるが如くして成功せぬものはないであらう。ところが朝鮮人は眞劍さが足りないといはれてゐる。不眞面目だといはれてゐる。また實際そのやうである。諸君はさうでないのか。國家は眞劍でない兵士に信頼を置くわけには行かない。産業にしろ、教育にしろ、今日の國家のすべてのことは戰爭だ。一人だつて不眞面目なものゝ介在を許さない。

禪をやれ、禊をせよ、と絶叫されてゐるのは、國民をますます眞劍にするためだ。この眞劍即誠は修行によつて、邪念を拂ふことによつて、心身を鍛錬することによつて、得られるものである。劍道も、柔道も、結局はこの眞劍の修行だ。その技術などは第二義的だ。この誠、この眞劍、この忠の人格あつてこそ、始めて學間も技術も役に立つのであつて、かゝる人格なきものゝ學問技術は國家の害にこそなれ、ためにはならない。弟妹諸君。反省せよ。從來の氣持や、生活を檢討せよ。そして血みどろの修行によつて、眞劍な、誠ある人格を建て直して、これを

陛下に捧げよ。これこそは諸君の絶對の義務であり、光榮であるものだ。

君に捧げること

金持にならう。樂をしよう。身體が丈夫にならう。これは誰もの慾望であらう。しかしこれらのものが國家の力なくして得られるものでないことは、ばたばたと[倒][[5]](#footnote-5)れるヨーロツパの諸弱小國の國民に觀て自明であらう。強大な祖國あつてこそ、わが身の幸福を期されるのだ。だから己を愛し、己が子孫を愛するものは國を愛せざるを得ない。

しかしこれは淺墓な愛國心だ。汚い心だ。田夫野人の心に過ぎない。

日本精紳はそれとは違ふ。天皇は國民の親にあらせられ指導者にあらせられる。天皇はその赤子たる國民を訓育して、愈々高き國民とし、この國民を通して、またこの國民の翼賛によりて人類文化完成の聖業を營ませたまふのである。これを逆に國民の方から觀れば、國民は皇運を扶翼したてまつることによつて、各自の個人としての、家としての、國民としての、人類の一員としての使命を達成するのである。これ日本の國體は　天皇を戴いての一家族だといふ所以である。即ち八紘一宇なる理想と、それの實現を御自ら使命となさせたまふ　天皇を中心として、國民が精神的に一體になるといふのが日本精神である。

であるから、家も國のため、己も國のために存在するものであり、從つて、國民各自の一生は職業奉公のためにのみ捧げられるのである。これを臣道實踐といふのであつて、これは歐米の個人主義とは實に對蹠的なも[の]である。

この日本精紳は決して、事變以來に始まつたのではない。況して獨逸を模倣したのではない。これは日本の歴史や文化全般を通して一貫して流れて來たものであり、日本文化の特色は實にこの一點にあるのである。これを忠孝一本の精呻といふのであるが、これは教育勅語の御精神である。この精紳が歐米思想に迷うて一時民家の間に薄められたことは事實であるが、事變以來その眞面目が現はれ來たのである。

萬世一系の　聖天子を仰ぎまつり億兆一心忠孝一本の精神で一體となつて、日本を益々大きく強く輝かしくして八紘一宇の理想を實現するために生き[[6]](#footnote-6)、といふ信念は如何に喜ばしいことであるか、如何に生甲斐のあることであるか。わが日本を最眞、最善、最美の國に仕上げる――これ以上働き甲斐あることはないではないか。

弟妹諸君。私はこれで一まづ筆を擱かう。私は聰明なる諸君がこの輝かしい理想と感情とに必らず共鳴し、奮起することを信ずる。そして血みどろの修行を始めることを信ずる。そして半島二千六百萬を一人殘らず力強い皇國臣民に仕立てゝ、陛下に差上げるために至誠を盡すことを信ずる。かうすることこそ、われら[の]祖先を生かし、子孫を榮耀あらしめる唯一無二の道なのだ。（完）(『新時代』1941年11月)

1. 『新時代』1941年10月号 [↑](#footnote-ref-1)
2. 『新時代』1941年11月号 [↑](#footnote-ref-2)
3. せんだつ「蝉蛻せんぜい」と同じ。迷いから覚めて悟りの境地に達すること。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 原文は「適切」になっている。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 原文は「例」になっている。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 「生き而して死なん」の誤りではないかと思われる。 [↑](#footnote-ref-6)